

銭形平次捕物控

晒し場は招く

野村胡堂

青空文庫

「親分、日本橋の騒ぎを御存じですかえ」

「知らないよ。晒し物でもあつたのか、——相對死の片割れなんかを、ぼんやり眺めてゐるのは殺生だぜ」

平次は氣のない顔をして、自分の膝つ小僧を抱いたまゝ、縁側から初秋の淺黄色の朝空を眺めて居ります。

八月になつて、少し涼風が立ち初めると、人間共も本心を取戻したか、御用はびつくりするほど暇。その代り質草も粉煙草も、結構な智慧までが盡き果てて、かう毎日天文ばかり見てゐる平次

だつたのです。

お勝手では、カタコトと、お仕舞やら三度の食事の支度やら、女房のお静の氣はひは絶える折もなく、平次の閑居は貧乏臭くはあるにしても、まことに充^みち足りた、その日くだつたとも言へるでせう。

其處へ時折子分の八五郎が、旋風^{つむじ}のやうに飛び込んで來るので、持ち込んで來る『大變』は十の一つもモノになれば結構で、大概は粉煙草と濫い茶にありついて、飄々^{へうく}として歸つて行くのが例ですが、どうかするとまた、飛んだ大物を嗅ぎ出して來て、平次に一と汗かゝせることがないでもありません。

「晒し物には違げえねえが、それが大變なんで」

八五郎はネタの出し惜みでもするやうに、長んがい顎を撫で廻します

日本橋の晒し場には、心中の片割れから女犯によほんの僧と言つたやうなものが、諸人への見せしめに晒され、晒される方はまた、それを死ぬより辛い耻としたればこそ、刑の目的も達したわけですが、今の偽悪者達なら、宣傳効果の逞たくましさを狙つて、進んで晒され度いと言ふ者が出て来るかもわかりません。

それは兎も角、八五郎の報告は奇つ怪を極めました。

日本橋の東詰の晒し場、この間まで相對死の片割れの、不景氣なお店たなもの者を晒してゐた筈むしろがこひ圍の中に、五十前後の立派な中老人が、死骸になつて晒されてゐるといふのです。

お上のしたことでない證據は、日本橋の橋番所でも知らず、その上日本橋の晒し物は、近頃殆んど生きた人間に限られ、死骸の晒し物などは幾年もないことで、わけても死骸の傷は、脇腹を深々と炙ぐられ、更に止め^{とッ}まで刺されてをり、尚ほ變つて居るのは、その死骸の側に、おほのこぎり大 鋸が一挺、血まで塗つて置いてあることだつたのです。

鋸引の極刑は今頃——平次が盛んに活躍して居る頃——は絶えてないことですが、古老の昔語りには残つて居り、主殺し親殺しなどといふ無道の極悪人に對しては、君臣制度や家族制度の保護のために、多分に封建的な政略の意味も含めて、これが實際に行はれて居たことは言ふまでもないことでした。

最初は極刑を受くる者の全身を箱に入れ、或は半身を土中に埋めて、通行人をして、望む者があれば、そなへつけ備付の鋸でその首を引かせ、あらゆる苦痛を與へて、七日にして漸く息を引取つたなどといふ記録が残つて居ります。

最初は鋸も竹製であつたらしく、後にはそれが金の鋸になり、更に首を引く望み手も少なくなつたものか、單に處刑者の首に傷をつけて、側に置いた鋸に血を塗るだけに止まり、更に下つては、形式的に鋸を側に置くだけになつたと物の本に書いてあります。

切支丹宗徒ははりつけ磔刑にされ、火を放つた八百長お七はひあぶり火焙になり、主殺しの直助權兵衛は鋸引にされたといふことは、この時代の世相の反映で、邪宗門と放火と主殺しが、極刑中の極刑を以

つて戒いましめられるところに、無智なるが故の爲政者の恐怖と、封建性の殻からを守り抜かうとする見かけだけの嚴重さがあつたわけです。

「そいつはイヤな悪戯ぢやないか。晒された人の身許がわかつたのか」

八五郎の報告が終るのを待ち兼ねて、平次は訊ねました。

「晒し物を見付けたのは夜の白々明け。四半刻と經たないうちに身許がわかつて、一應お役人立ち會ひの上、引取つて行きましたよ」

「誰だえ」

「誰だと思ひます、親分」

八五郎は自分の話の奇抜さに陶醉して、すっかり持たせ振るの
です。

「止せやい、馬鹿々々しい。俺とお前でないことは確かだ。それ
とも、江戸中の人間の名前を並べて見ようか」

「へッ、それには及びませんがね、江戸一番の無事な人間——殺
されさうもない人間が殺されて居るんだから——親分だつて驚き
ますよ」

「驚くよ、驚きや宜いんだらう」

「通り三丁目の翁屋おきなや小左衛門で」

「何？ あの一代に江戸で何番といふ身しんしやう上うへを拵へた、翁屋の
主人が殺された上に日本橋に晒さらされたといふのか」

「こいつはびつくりするでせう」

「あんな評判の良い人がね。誰が一體そんな事をしたのだ」

「それがわからないから、あつしが錢形の親分のところへ來たぢやありませんか」

「よし、お前に負けた。あの邊は繩張り外だが出かけて見よう」

「そら來た、占め、占めと」

八五郎は平次を引張り出すのが役目だったのです。

二

平次と八五郎が、通り三丁目の翁屋に着いたのはもう晝近い時

分でした。前代未聞の事件で、騒ぎが大袈裟おほげさだつた爲か、遠い親類も近い他人も一ぺんに突つ掛け、店から奥へまこと押すな押すなの混雑です。

かゝる際にも取つて付けたやうなお世辭を言ふ、番頭の市助に案内されて、平次と八五郎はその人混みの中を、奥へと通りました。縁側の端つこに除よけたり、障子の蔭へ滑り込んだり、彌次馬か弔問客かわからない人達は好奇の眼を光らせて、この名ある岡つ引を見送るのは、あまり結構なたしなみではありません。

奥の八疊、かなり豪勢な部屋に、主人小左衛門の死骸は、清められたまゝ贅澤過ぎるくらゐな床の上に寝かしてありました。佛の前には俄にはかのことながら一と通りの香華を供へて、主人の妾めかけお春

と、主人には義理のある伴の松次郎と、その妹分で、いづれは松次郎と祝言させる筈の貰ひ娘のお袖が、ひどく取逆上とりのぼた様子で、憑つかれたもののやうに香ばかり燻いぶして居ります。

平次は行脚みざり寄つて香を捻ると、家族の人達へ一應の挨拶をして、問題の死骸の側に膝を寄せました。死骸は夜露に打たれたせゐるか黄色く引締つて、蠟ろう化くわしたやうな感じですが、打ち見たところ榮養も良く、五十とは思へぬ若々しさで、身體全體も何んとなく逞たくましい感じがあり、昔は武家であつたといふ噂を思ひ出させます。

傷は左脇腹を、袷の上からひどく炙はぐられたもので、何んかの弾はずみで左手を擧げたときやられたらしく、刀の切つ尖は間違ひも

なく心の臓を破つてゐさうです。

「袖は縫はれてゐませんね」

八五郎は側から口を出しました。

「良いところへ氣が付いた、——まるで手を擧げて、此處を刺してくれと言つたやうぢやないか」

平次は珍らしく八五郎を褒めて、斯う註ちゆうを添へます。腕にも袖にも何んの異状もなく、脇の下へ眞つ直ぐに刀を突つ込むといふことは、餘程の偶然の機會でも掴まなければ出來さうもないことです。尤も外に喉笛に一箇所突き傷がありますが、これは死んだ後の止めで、あまり血も出て居りません。

「飛んだことでしたな、御新造」

平次は一とわたり死體の調べが済むと、振り返つて、神妙に控ひかへてゐる、妾のお春に聲を掛けました。妾と言つても、今から五年前小左衛門の先妻——即ち松次郎の母親が亡くなつてから、間もなく翁屋に入つた女で、水商賣などの浮いた女ではなく、もとは武家の出といふ噂があり、近く本妻に直して、親類中へも披露おかみをすることになつてゐるといふ、押しも押されもせぬ翁屋の内儀おかみだつたのです。

年の頃は三十そこく、美しいといふよりは、確りした女でした。小柄で色白で、中なかだか高の顔、大きい眼、何處までも知的で、透明でそしてイヤ味のない女ですが、世馴れた三十女らしく、言葉の端々、身じろぎの節々に、得も言はれぬ魅力——色つぽさと

は又違つた高貴な匂ひの漂たぐよふ女でした。

「有難うございました。——私はもう途方に暮れてしまひましたよ、親分」

お春はさう言つて、痛々しいほど萎しをれるのです。五年もつれ添つた主人に死なれてしまつては、本妻に直して貰ふ望みも断たれ、やがてはこの儘めかけ妾手掛の名で、この家から抛はふり出される運命でせう。

「ところで御主人が昨夜出かけたのは？」

「まだ薄明るい頃でした。鎌倉町の津々井様へ、久し振りごで碁を打ちに行くと申しまして」

「で？」

「長くなりさうだからと、供をして行つた小僧の留吉を先に歸し、少し酔つて、津々井様を出たのは、亥刻半よつはん（十一時）、子刻こゝのつ

（十二時）近かつたと申します」

「それで、昨夜一ゆふべと晩歸らなかつたので心配したことでせうな」

「子刻こゝのつ（十二時）過ぎになつても歸らないので、心配いたしました。店から久治どんや留吉や、番頭の市助どんまで出て貰ひましたが、一向に行先がわからず、津々井様を出たのは確かです。から、何處かへ廻つたことと思ひ込んで、諦めて今朝まで待つて居りますと、あの騒ぎで——」

お春はその時の驚きを思ひ出したらしく、大きく固唾かたづを呑んで、自分の胸を押へるのでした。

「脇差か何にかを用意はしなかつたんで？」

「紙入止めの脇差を一本差して居りました。もとが武家だつたので、一本でも差さないと腰がきまらないからと申して居りました」

「その脇差は？」

「何處へ行つたか見えません」

「身體は丈夫だつたことでせうな」

「至つて丈夫でしたが、唯、二三年前から軽い中風の氣味で、左の腕と足が重いやうだと申し、氣をつけて見ると、少し跛足びつこを引いて居りました」

妾お春の答へは何んの淀みよどもなく、申分のないほどハキハキして居ります。

「御主人を怨む者は？」

「そんなものはある筈もございません。御存じの通り、人様にはよくしてやるのが主人の流儀で——」

さう言はれると、平次はまさにも一言もありませんでした。翁屋小左衛門は、短かい間に一と身しんしやう上しやうを築き上げた精悍無比な腕うできゝでしたが、五十近くなるとさすがに氣が挫くぢけたらしく、近頃は慈悲善根と言つたやうな、誰でも暮しが樂になると考へつく、後生願ひの投資に一生懸命で、人に彼れこれ言はれるやうなサモしい行ひなどは微塵みぢんもなかつたのです。

「武藝のたしなみは？」

「自慢をして居りました。——でも昔二本差したところのある殿方

は、どなたも腕自慢を遊ばすやうで」

お春の頬は僅かに綻ほころびます。この女の聰明さは、妙なところまで観察してゐるのでした。

三

お春の話によると、翁屋小左衛門はもと總州關宿七萬三千石、
牧野備後守びんごのかみの家中で、碓氷貞之助うすひと名乗り、中土格ながら羽振
りの良い侍でしたが、同僚と争ふことがあつて永のお暇となり、
聊いさぐかの知邊を頼つて翁屋に身を寄せ用人棒とも手代ともなく暮し
て居るうち、その商才たくの逞ましさを、先代小左衛門に見込まれて

番頭に引揚げられ、翁屋内外一切の事を支配しましたが、二十年
 前先代の小左衛門が急死した時、親類方の勧めで後家お友のこ
 ろに入聳となり、番頭から主人への早變りをしたのだといふこ
 事です。

小左衛門の商才は、翁屋の主人になると益々冴えて、この二十
 年間に翁屋の身上を、三倍五倍にしたと言はれて居ります。も
 とは裏廻りのさゝやかな小間物屋でしたが、土地と家作を買ひため、
 その上廻した金が利子を産んで、何時の間にやら表通りに堂々た
 る店を張り、昔ながらの小間物屋の暖簾のれんは掛けて居りますが、も
 とがもとだけに、橋の南きつての良い口きゝになつて居りました。
 伴の松次郎は二十四歳、これは先代小左衛門の忘れ形見で、殺

された小左衛門とは繼ましい仲ですが、小左衛門には本當の子がなかつたので、自分の子のやうに大事に育てて來た——と、これはお春も番頭達も、近所の衆の噂も一致して居ります。

逞しい繼父の小左衛門に似ず、華きやしや奢しゃで、ちよいと良い男で、そして遊び好きらしい、にやけたところのある若者、八五郎などの嫌タイフひな型タイプに屬する若旦那型です。

「若旦那は昨夜何處に居なすつた」

平次はこのニヤケ男に銚ほしを向けました。

「風邪氣味で、私の部屋に引込んで休んで居りました」

「時刻は？」

「戌いっくはん刻半（九時）頃でしたが」

「誰も一緒に居た者はなかつたことだらうな」

「へエ、いつも部屋へ引込めば私一人で」

「部屋は？」

「向うの端になつて居りますが」

平次はそれ以上は追及しませんでした。が八五郎に眼配せすると、心得た八五郎は何處かへ飛んで行つたことは言ふまでもありません。

娘のお袖といふのは十八、これは遠縁の親類から貰つた養ひ娘で、行くくは、松次郎と一緒にして、翁屋を繼がせようといふのが小左衛門の腹らしく見えましたがお袖があまりに若過ぎ、内氣過ぎて、遊び好きの若旦那松次郎の相手は勤まらなかつたら

しく、二人は何時まで他人で、若旦那の松次郎は羽を伸ばして遊び呆けてほうる様子でした。

尤も、お袖は大した美人ではなく、目鼻立が整つて居るといふだけで、媚態びたいとお世辭と戀や遊びの技巧を嘗なめ盡してゐる松次郎の相手には、喰ひ足らなかつたことは想像されます。紅も白粉も心持だけ、瓜うりぎね實顔の淺黒い顔の色までが、健康さうで一種の魅力ですが、脂粉の氣に中毒した松次郎には、それは野暮つたく頼りなく、埃臭ほこりく見えたことでせう。何を訊いても一向に埒があかず、平次も諦らめて外へ出る外はありませんでした。

縁側へ出ると、若い小意氣な男が庭のあたりをウロウロして居ります。手代の久治と言つて二十八、これは平次の調べの模様を、

よそながら立ち聴くつもりだったかも知れません。

「お前は？」

「久治と申します。へエ、奉公人で」

「翁屋の身寄りではあるまいな」

「唯の奉公人で長い間お世話になつて居ります。十五六年になりませんが」

長い間のお店者の生活で、^{たな}強かな魂と、^{したゝ}柔順な態度と、そして利害に敏い眼とを養はれたらしい久治は、平次の抜け目のない問ひの前に、自若として愛嬌笑ひを忘れません。

「主人はどんな人だった」

「良い方でした。世間の評判通り、慈悲深くて、思ひや

りがあつて」

「それほど、わけのわかつた主人が、暖簾のれんをわけてやるでもなく、お前のやうな立派な男を、十五六年も雇つて置いたのはどういふわけだ」

「私は身寄りも何んにもなく、年季が過ぎても進んで此處に奉公して居たのでございます。暖簾でもわけてやらうと言ふお話もありましたが、私の方から辭退して居りました。その邊のことは番頭さんにお訊き下さればよくわかります」

恐らくそれは本當のこととせう。久治の態度には、聊いさゝかかも惡びれた色はありません。

四

番頭の市助は四十五六の物の汚點しみのやうな男でした。平次が久治と別れて、家を一と廻りすると、物言ひ度氣に、その後から跟いて來て、木戸を開けてやつたり、小石を拾つて退けたり、うるさく世話を焼いて居ります。

「若旦那の部屋といふのは？」

「此處でございます」

突き出したやうに建て増した、新しい四疊半を市助は指します。

「此處へ獨りで休んで居ると、勝手な時、夜でも夜中でも外へ出られるわけだな」

「――」

市助は黙つてしまひました。平次の問ひに含まれた重大な意味に怯おびえた様子です。

「あれは？」

平次は氣を變へて、翁屋の裏に建て連ねた五六軒の長屋を指しました。

「亡くなつた旦那の御親切で、古いお知合でお困りの方をお入れ申して居ります」

「それは奇特なことだな――どんな人が入つて居るんだ」

翁屋小左衛門が慈悲人情わかまを辨わへるといふ話は、斯こんなところから生れて來たのでせう。長屋はほんの八坪前後、まことに見る影

もないものではあるにしても、唯で人を住ませる爲に建てるといふことは、容易のことではありません。

「大抵は町内の困つた方々でございますが、中には昔主人がお侍だつた頃の朋ほうばい輩衆の身寄りの方もあります」

「例へば？」

「麻井大七郎様の御子様方で、幸之進様に、お加奈様など」

「その方にちよいと會つて行かう」

平次は木戸を開けて裏の路地へ出ると、早速その突き當りの長屋の前に立つて居りました。

「御免下さい」

「——」

美しい娘の姿がチラと見えました。平次を見ると少しあわて
氣味に、バタバタと次の間へ入つて、入れ代つて、二十三四の若
い男が立ちはだかるやうに入口に立ちました。

「何にか御用かな」

若い男の肩は少し聳そびえます。相手を岡つ引と知つて居る様子で、
その露骨な反感に、妙にわざとらしさがあります。

「麻井幸之進様でせうな」

相手は尾羽打枯らして居りますが、明かに武家とわかつて居る
ので、平次は少し丁寧になりました。

「左様」

「翁小左衛門様とは昔からの御ぢっこん昵懇で？」

「關宿で、父が同役であつたよ」

「御親父様は？」

「二十年前人手にかゝつて相果てたといふことだ。——その場に

居合せて、早速の敵を討つてくれたのが、碓氷貞之助殿——即ち

翁屋小左衛門殿だ」

平次は黙つてその先を促うながしました。

「そのため、碓氷殿は、朋輩を刃傷したかどで永の暇。麻井家には何んの御とがめもなく當時五歳の拙者は叔父の後見で跡目を相續しかすることになつた。併しそれも一時、拙者元服すると間もなく、十何年前の争ひが巻き起された」

「——」

「亡父の怨みの相手、石崎一族の讒さんげん言で、拙者も家を追はれ、妹と二人、江戸へ参つて艱難して居るところを、フトした事から碓氷氏に見出され、仕官の道の開けるまで、この長屋に住んで居るといふわけだ」

「ところで、仕官の御心當りは？」

「幸ひ、申分のない口があつた。西國のさる大々名の御見出しだ。九月にでもなれば御目見得の運びになる筈」

「それはお目出度いことで」

平次は一應のお祝ひを言ふのでした。

「もうそれで宜いのか」

と麻井幸之進。

「麻井様、御妹様から一寸お話を承り度いのですが」

「左様か。これよ、加奈」

「ハイ」

妹の加奈は逃げも隠れもならず、恐る／＼顔を出しました。丸ぼちやの、お品の良い二十歳くらゐの娘です。

「お嬢様、變なことを伺ひますが隠さずに仰しやつて下さい」

「ハイ」

「あのお兄様は、昨夜、一と晩何處へもお出掛けはなかつたでせうな」

「ハイ」

お加奈は膝ひざに兩手を置いて、顔を眞つ直ぐに、何んの躊躇ちゅうじゆもな

く答へるのでした。

「どうも有難うございました。飛んだお邪魔で」

平次はもう、この上訊くこともありません。

五

「親分いろく面白い事がわかりましたよ」

八五郎はフォックス・トロツトの足取りで戻つて來ました。非常に得意になつて居る證據です。

「先づ妾めかけのお春の評判はどうだ」

「申分なし。日本一の貞女で、江戸一番の賢い女で、女の癖にケ

チでなくて」

「女の癖にケチでないはひどからう」

「親分ところの姐さんは別ですが」

「言譯には及ばないよ」

「あんな町内受けの良い妾は神武以來ですね」

「言ふことが大袈裟おほげさだな」

「權現様御入國以來と言つても宜い」

「それから？」

「それに比べて、若旦那の松次郎は、——あれは大變な野郎ですよ。おしやれで高慢で、道樂が強くて親不孝で」

「まるで八五郎見てえだ」

「冗談ぢやありませんよ」

「殺された義理の父親小左衛門との仲は？」

「犬と猿だつたさうで。あんな結構な旦那を殺したのは、あの二
キビ野郎に違げえねえと専ら近所の噂ですよ。ちよいと脅かして
見ませうか、ペラペラと親殺しの始末をしやべつちまひさうです
ぜ」

「いや、まだ證據はない——尤もあの若旦那の部屋から、夜は何
處へでも人知れず抜け出せることは確かだ」

「新右衛門町の小唄の師匠お里榮りえのところへ毎晩入り浸つてゐる
さうですよ、——ところで親分」

「何んだえ、ひどく改まつて」

「あの翁屋の裏の長屋に居る、若い浪人者兄妹に會ひましたか」

「會つたよ。それがどうしたんだ」

「あの兄の方の幸之進とか言ふのが、翁屋の主人には海山の恩を受けて居るから、下手人がわかつたら、繩を打たせる前に、きつと斬つてやる、——と言つてゐるさうですよ」

「成程、そいつは厄介だな。外に聴き込んだことはないか」

「まあそんなところですね」

「手代久治の身持はどうだ」

「大篋べらぼう棒で」

「何んだえ、その大篋棒といふのは」

「ちよいと良い男でせう。翁屋の手代だ、金廻りだつて悪くない

筈でさ。それがまるつきり遊ばないんですつて」

「言ふことが變だな。遊ばない人間が大篋棒なら、俺だつて大篋棒だぜ」

「お静姐さんといふものが付いてまさあ、江戸一番の貞女だ」

「止さないか、人聴きの悪い。ところで遊ばないのが大篋棒なら遊ぶのは何んだ」

「大馬鹿野郎で」

「どつちにしても助からねえな、——お前なんざどつちの口くちなんだ」

「癩しやくにさはるが何方でもありませんよ。大馬鹿野郎になりきるほどの金は無し、大篋棒になるにしては、少し浮氣っぽい」

「自分でさう極めて居るんだから世話アねえ。ところでその大笹棒の話だが、久治は何にか大望でもあるのか」

「白雲頭の頃から翁屋に奉公して、親爺は間違ひもなく中氣で死んでゐるから、親の敵を狙つてゐる筈はありませんよ。それに二十歳頃までは、なか／＼よく遊んださうで」

「大笹棒と大馬鹿野郎と一人で兼ねて居るとして、番頭の市助はどうだ」

平次は話題を變へました。

「あれは大間抜けですよ。——尤も取り込むことは名人で、若旦那が道樂をしようが、手代の久治が皮肉を言はうが、一向お構ひなしでせつせと自分の懐ふところ中へ、主人の金を取り込んでゐるさう

ですよ」

「それぢや、大間抜けでもあるめえ」

「その金を内々で八分に融ゆうづう通してゐるが、半分は踏み倒されるといふから、あまり利口な人間ぢやありませんね。せつせと稼いで溜めた金は、三文無くしても惜しいわけだが」

「博奕打や相場師や——大きく儲ける人間は金づかひが綺麗で、バラ撒まくことを何んとも思つちや居ない、——市助が金にこだはらないのは、ワケがありさうだな」

「主人の金を取り込めば、氣も大きくなりますよ」

八五郎と一かど哲てつがく學らしいことを言ふのでした。

六

「親分、これから先は何をやらかしや宜いんで」

「サア」

「もう打つだけの手を打つてしまつたやうですね。歸りませうか」
八五郎はもう諦らめた事を言ふのです。

「いや、出来るだけの證據を集めて置き度い。差當り新右衛門町の小唄の師匠のところへ行つて見ようか」

「あの師匠が何んか知つて居るでせうか」

「若旦那の松次郎が、昨夜師匠のところへ行つたか行かないか、それを訊き度いのだよ」

「行つたといふにきまつて居るぢやありませんか。本當に行つたのなら、誰だつて行つたと言ふし、行かないにしても、若旦那に言ひ含め^{ふく}られて、行つたことにするに違ひありません。二人はもう大變な深間だといふから」

八五郎は心得たことを言ふのです。が、直ぐ鼻の先の新右衛門町の、小唄の師匠お里榮の家の、御神燈の下に立つた平次と八五郎は、見事にこの豫想を裏切られてしまつたのです。

「若旦那は——昨夜、口惜^{くや}しいけれどいらつしやいませんよ。——内弟子も下女も居るしお隣りも近いことだから、訊いて見て下さい。——どうかしたら若旦那は、近頃あの許婚のお袖さんがよくなつたんぢやないか知ら。氣が揉めるわねえ」

そんな事を言つて、洗ひ髪の衣紋えもんをグイと抜く、凄えい年増のお里榮だつたのです。

平次は師匠のうちを飛び出すと、

「どうだえ、八。變なことになつたぢやないか」

「何が變で？ 親分」

「あの女は若旦那を庇かばつてやることさへ忘れてゐるんだ。若旦那の松次郎は、親殺しの下手人にされかけて居るのに」

「すると、矢つ張り若旦那が下手人でせうか」

「いや、あの若旦那は、本當に風邪を引いて昨夜は宵寢をして居たかも知れないよ。親殺しでもしようといふ悪黨が、下手人の疑ひを受けた時の逃げ路くらゐは拵へて居るのが當り前だ」

「そんなもんですかね」

「もう一度翁屋おきなやへ引返さう。段々面白くなつて來る様子だ」

平次はひどく張りきつて居ります。

「翁屋で何を捜すんです？」

「まだ會つてねえ人間が一人二人居るだらう」

「下女のお鐵に、小僧の留吉くらゐのものですね」

「それその通り二人も居るぢやないか」

平次と八五郎が翁屋のお勝手から顔を出すと、其處には下女のお鐵が、店から奥への騒ぎも知らぬ顔に、せつせと晝のお仕舞などをして居りました。

「お鐵さんと言つたね。——忙しいことだらう」

平次はさり氣ない調子で聲を掛けました。二十七八、どうかしたらもう少しとつて居るかも知れません。蒼黒い顔をした醜みにくい女で、その醜さを意識して居るだけに、邪推じやすゐ深くて氣が變り易やすくて、そのくせ涙もろくて、誰にでも自分を訴へずには居られないと言つたタイプの女です。

「何んか御用ですかね、親分さん」

お鐵は濡れた手を拭きくお勝手口へ顔を出しました。

「つまらない事を一つ二つ訊き度いのさ。お前なら知つてる筈なんだが」

「へエ？」

「番頭の市助どんが、何百兩といふ金を廻して居る様子だ。大おほだ

店の支配人だから、大金を持つて居たところで不思議はないや

うなものだが、それを踏み倒されても、驚く様子もないのは唯事ぢやない。翁屋の奉公人は、そんなに大金が轉げ込むのかえ」

「飛んでもない親分さん。私は年に二兩こつきりで」

「だから——」

「あれは御新造さんから、そつともらつて居るんですよ」

「御新造のお春さんからか、——番頭さんとは年が違ひ過ぎるぜ」

「あら、そんな色つぽい話ぢやありませんよ。口留め料ですよ」

「口留め料？」

「何んか、動きの取れない證據をつかんで居る様子ですよ」

「證據？」

「時々御新造に喰ひ下がつて居るところを見ますよ。——尤も、その強請ゆすりの種がわかりさへすれば、私だつて年に二兩で我慢はして居ないでせうが」

お鐵は慾の深いことを言ふのでした。

「それから、もう一つ訊き度いが、殺された主人と、一番仲の悪かつたのは誰だ」

「若旦那様ですよ」

お鐵の答へは至つて簡明です。

「主人と仲の好かつたのは？」

「さア、お嬢さん知ら、——それとも、お長屋の麻井幸之進様
 知ら、——麻井様とは親子のやうでしたよ。旦那様が左足が少

し悪かつたので、縁側から降りる時なんか、御新造様かお嬢さんか、でなければ、麻井様がお貸ししてあげることになつて居りました。——番頭さんや久治どんでは、抛はふり出されさうで氣味が悪いと仰しやつて」

お鐵の話はなか／＼に行届きます。

「有難う、お蔭でいろ／＼の事がわかつたよ。それからもう一つ、これでお仕舞だが、昨夜主人が歸らなくて心配した時、皆んな外へ出て見たことだらうな」

「え、私と若旦那の外は、皆んな一度づつ外へ出ました。番頭さんと久治どんは、鎌倉町の津々井様まで二度も行きましたし、留吉どんとお隣りの麻井様は、日本橋からお濠端へ出て、江戸橋の

方まで廻つて見たと言つて居ました」

「御新造は？」

「一番心配して、遅くまで外に居たやうです」

それはさもありさうなことでした。

七

「サアわからねえ。これはどう言ふことになるんです、親分」
八五郎はたうとう音をあげました。

「だんくわかつて来るぢやないか。それ見ろ、誰か飛んで来る
ぜ」

平次は早くも、土地の下つ引が二人、此方へ飛んで来るのを見付けました。

「親分、血だらけの脇わきざし差が見付かりましたよ」

「何處にあつたんだ？」

「いつこくぼし一石橋の下へ抛り込んだのが、運よく石垣に引つ掛つて、わけもなく見付かつたんで」

「誰の差料だ」

「殺された主人が昨夜差して居た脇差に間違ひありません」

「鞆きやはなかつたのか」

「鞆は見えませんが、何處か下水へでも抛り込んだことでせう」

「それからもう一つ」

「――」

「晒さらし場に置いてあつた鋸のこぎりは、此家こゝの物置から持出したものとわかりました」

「目印でもあつたのか」

「番頭さんが来てさう言ふんだから間違ひないでせう」

報告がをはると、二人の下つ引は日本橋へ引揚げて行きます。

「聞いたか、八」

「聞いた筈ですがね？ それがどういふことになるんです」

「下手人の正體が段々わかつて來るといふことさ。――ところでもう一と働き」

「何をやるんです」

「西御丸下の牧野備後守様御上屋敷だ」

平次や八五郎に取つては、大名屋敷はこの上もない厄介な場所でしたが、藩主備後守は幸ひ總州關宿に在國で、江戸屋敷は、わけのわかつた、小意氣な御留守居金山主膳が承つて居て、話は思ひの外簡單（うち）に埒（うち）が明きました。

今から二十年前、關宿藩から追はれた、碓氷貞之助（うすひ）（翁屋小左衛門）のことを訊ねると、

「いや、あれは氣の毒なことであつた。御城下で家中の士三人の果し合があり、麻井大七郎なる者は、石崎求馬（もとめ）なる者に討たれて、碓氷貞之助一人生き残つたが、善惡邪正は兎も角、争ひ（もと）の基は婦人とわかつて、生き残つた碓氷貞之助殿も、有無を言はず永の

暇と相成つたのぢや」

「碓氷貞之助様は、石崎求馬様と麻井大七郎様を討つたのでせうか、それとも、どちらか一人だけ討つたのでせうか」

平次は押して訊ねました。

「それも最初はわかり兼ねた。碓氷貞之助が二人を討つたとも言はれ、麻井大七郎を討つたとも言はれたが、後に二人の傷を調べた上果し合ひを密かに見て居た者もあつて、麻井大七郎が石崎求馬に討たれ、碓氷貞之助がその石崎求馬を討つて、親友麻井大七郎の敵を討つたものと相わかつた」

「それは確かでせうか、一つ間違ふと大變なことになりますか」
 「間違ひはない。碓氷貞之助は手槍を持つて居たし、兩刀には血

の跡もなかつた。——ところで討たれた二人の内、麻井大七郎は刀で斬られて居り、石崎求馬は槍で突かれて死んでゐた」

「どうしてそれを？」

「碓氷貞之助殿は、氣の毒なことに殿の御覺えが目出度過ぎて、嫉ねたまれたのぢや。長い間その事を打ち明ける者もなかつたが、年が経つにつれて、正しい方が勝ち、後には生き證人まで現はれたが、今更眞しんじつ實を知らせるのは殿御英明を傷つけるやうで、そのまゝ伏せてしまつたのぢや。——あれからざつと二十年、もう打ち明けて話しても差支はあるまい」

武家の體面に歪ゆがめられた、馬鹿々々しい事件の真相を聽いて、平次も呆れ返つて言葉もありません。

八

「さア大急ぎだ。——來い八」

「何處へ行くんです」

「翁屋へ引返すのだよ。——くたびれたか」

「疲れたわけぢやありませんが、下手人の見當でも付かなきや、
腹が減るばかりで」

「下手人はわかつて居るのだよ。後でうんと喰はせてやる、來い」
「さう言はれるとシヤンとなるから不思議ですね」

無駄を言ひながら、通り三丁目の裏へ入つたのは、もう夕暮近

い頃でした。

平次は翁屋を横に見て、その裏の長屋に、麻井幸之進の家を叩きました。

「誰だ。あ、平次親分か。又来たのか」

内職をして居たらしい麻井幸之進は、あわてて取片付けると、無愛想な調子で平次を迎へたのです。

「折入つてのお話がありますが——」

「よし、承らう。これ加奈、暫らく翁屋へ手傳ひにでも行くが宜い」

妹が邪魔になると思つたのか、お加奈を外へ出してやると、幸之進は改めて平次に對しました。

世辭も愛嬌もありませんが、腕は相當にあるらしく、如何にも良い青年武士です。但したゞこんなのは、思ひの外思慮が淺く、一徹てつなことをして大間違ひをするのではないか、——平次はフトそんな事を考へて居る様子です。

やがて二人の座が定まると、平次は靜かに話し出しました。關宿の城下に起つた、二十年前の三人侍の果し合ひの一埒らつ。

「——」

それを聽く麻井幸之進の顔色が、次第に眞つ蒼に變つて、額にあぶらあせ脂汗あぶらあせの浮くのを平次は見遁みのがす筈ありません。

「これは牧野備後守様江戸御留守居、金山主膳様の打ちあけ話で、一厘一毫がうの掛け引も御座りません。これが本當とすると、翁屋小

左衛門の碓氷貞之助様は、貴方様の爲には、親の敵を即座に討つてくれた大恩人」

「——」

「その大恩人を殺した下手人を、御存じならば、打ち明けて下さるのが、二十年前に亡くなられた御父上への大孝。昨夜人手に掛つて死んだ、翁屋小左衛門様へも、何よりの報恩と思ひますが、如何でせう」

平次は詰め寄るのでした。

「——」

麻井幸之進は、深々とうな垂れてしまひました。脂汗は益々繁く、無念の唇はキリリと血の出るほど噛みしめられます。

「打ち明けて下さらなければ、萬已むを得ません。私は私の役目柄、繩打つて引立てることになります——」

「待つた、待つてくれ平次殿。如何にも打ち明けよう。いや、翁屋小左衛門殿を害めた下手人、間違ひもなく引渡さうが——牧野様江戸御留守居の金山様にお目にかゝり、この耳でもう一度、二十年前の果し合ひのことが確かめ度い——」

「——」

「たつた一と晩待つてくれぬか平次殿。麻井幸之進、命を投げ出してのお頼みだ」

麻井幸之進は、兩刀を遙かの方に投げやると、疊に額を埋めて平次を拜むのです。

「拜んぢやいけません。麻井様、——御尤もな御頼みではありませんが、それでは？」

「いや、萬一の間違ひに備へて、一と晩、人質として妹加奈をお預けしよう」

「飛んでもない、そんな事」

平次は手を振つてそれを拒こぼみましたが、結局は麻井幸之進の熱意に打ち負かされて、八五郎を促うなしながら、一應引揚げる外はなかつたのです。

九

「サア、大變ツ、親分」

翌る日の朝、八五郎が持込んで來た大變は近頃珍らしく猛烈なものでした。

「何んだ、八」

「何んだぢやありませんよ。大變も大變、古渡こわたりの大變、江戸中の大騒ぎですよ」

「わかつて居るよ。あの若い浪人者の麻井幸之進といふ人が、腹でも切つたんだらう」

「あツ、親分はそれを知つて居たんですか」

「知つて居たわけぢやないが、生きて居れば今日は縛らなきやならないのさ」

平次はそんな事まで考へて居たのです。

「たゞ腹を切つただけぢやありませんよ。昨日の朝翁屋小左衛門の死骸を晒さらしてあつた、あの日本橋の晒さらし場へ入つて、見事に腹を切つて死んでるとしたら、どんなもんです」

「そいつは念入りだな。翁屋小左衛門を、親の敵と思ひ込んで斬つたお詫わびだらう」

「その上、まだ驚くことがありますよ」

「何んだえ」

「腹を切つた麻井幸之進は、自分の前へ生なまく首びを一つ据ゑてあつたんです」

「えッ」

「こいつは親分も目が届かないでせう」

「誰の生首だ」

「翁屋の妾めかけ——あの綺麗で利口で、評判の良いお春の生首ですよ」

「あつ、矢つ張り、さうか」

平次も唸うなる外はありません、——それだけこの事件は、平次の想像を飛躍して、奥の深いものだったのです。

×

×

×

女の生首を前に置いて、腹を切つた若い武家の噂は、八方に飛んでその前日、同じ日本橋の晒し場に、鋸のこぎりと一緒に死骸を晒された、大町人翁屋小左衛門の噂と共に、暫らくは江戸中を騒がせました。

事件が漸く^{ようや}落着して、ほとぼりもさめかけた頃、平次は八五郎のために、相變らずこの事件の繪解きをしてやつたことは言ふ迄もありません。

「妾のお春は悪い女さ。手代の久治と仲がよくなつたが、二人共恐ろしく利口だから、用心に用心をして誰にも氣取られなかつた。が、たつた一人、二人の仲の臭いことを嗅ぎつけ、動かぬ證據を握つて居る番頭の市助の口は、慾が深いから金をやつて封じ、不義の快^{くわいらく}樂^{らく}に耽^{ふけ}つて居たが、何にかの弾^{はず}みでそれが主人の小左衛門に嗅ぎつけられ、急に殺す氣になつたのだらう」

「太^{ふて}え女ですな」

「だが、小左衛門はもと武家の出で、少し中^{ちゆうふう}風の氣味でも、

お春や久治には殺せさうもない。そこで、二十年前の關宿の三人果し合ひの事を聞き噛つて居るお春は、思慮の浅い麻井幸之進に取入り、何にか證據のやうなものを拵へて、幸之進の父親麻井大七郎を殺したのは、碓氷貞之助うすひの翁屋小左衛門だと吹込んだことだらう。——さう思ひ込ませたのはお春の利口さと凄腕だ」

「——」

「幸之進は前後の考へもなく、當の敵の妾の言ふことだから、そのまゝ信用して小左衛門を討つ氣になつたが、丁度その時、長い間の望みが叶つて仕官の道が開けて居るので、今頃敵討騒ぎを起しても、相手が強いから萬一返り討ちになつてはつまらないし、もう一つは仕官の口がフイになるのも恐ろしかったので、鎌倉町

から歸るところを待ち受け、親切らしく持ちかけて、足の不自由な小左衛門の左の腕を自分の肩に掛けさせ、邪魔になる小左衛門の脇差を預ることにして、その脇差を抜いて脇腹へ突つ込んだ」

「——」

「一とたまりもあるわけではない。——小左衛門の死骸の袖にも腕にも刃物の跡のなかつたのはその爲だ」

のこぎり
「鋸は？ 親分」

「場所は日本橋近かつたので、幸之進は死骸を晒しさら場に抛り込はぶ込んだ。萬人に見せて怨みを晴すつもりだつたらう。——それを主人の迎へに行つた妾のお春が、途中で幸之進から聽いて引返し、自分の家の物置から鋸を持出して、死骸の側へ置いたに違ひあるま

い。鋸引は主殺しの處刑だ。しごき翁屋小左衛門が、二十年前の主人だった、先代の翁屋小左衛門を殺したやうに匂はせ、先代小左衛門の實の倅の松次郎が、本當の親の敵——義理の父親を討つたといふ具合に見せたかつたのだらう」

「へエ、恐ろしく考へたものですね」

「お春といふ女は恐ろしい女だよ、——だがあんまり細工過ぎたのと、あの晩松次郎は間違ひもなく風邪の氣味で自分の部屋に籠こもつて居たとわかつて、俺は幸之進に疑ひを向けた」

「へエ、どんなわけで」

「翁屋小左衛門が、安心して脇差を預けた上、左手で相手の肩に凭もたれるのは、麻井幸之進の外にはない」

「成程ね」

「お春に騙だまされたとわかると、幸之進は矢も楯たてもたまらなかつた。小左衛門へ詫わびる心持でお春を殺して自分も腹を切つたのは、――氣の毒だが思慮の足りなさから起つたことさ」

「あの妹娘のお加奈はどうなつたでせう」

「翁屋の養ひ娘、お袖とは仲よしだから、いづれ引取られることだらう。翁屋は番頭も手代も阿呆あほう拂ひになり、倅の松次郎も眼が覺めて、帳場へ坐るやうになつたさうだから、いづれは評判を持ち直すことだらう」

平次は言ひ了つて、靜かに煙草をすふのでした。これはさすがの錢形平次にも、全部へは眼の届き兼ねるほどの事件だつたので

す。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十八巻 遠眼鏡の殿様」同光社

1954（昭和29）年6月25日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋新社

1950（昭和25）年9月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

晒し場は招く

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>